

夜毎、  
よごと

君とくちづけを

### プロローグ

腕時計を確かめると、時刻は午後八時四十分。約束の時間をとくに過ぎていて、私、広瀬真雪は駅からの道を必死で走っていた。向かう先は会社の同期の男である、上谷理都の住む高級マンション。駅から近い場所にあるおかげで、なんとか例の時間には間に合いそう。部屋の鍵を持つてはいたけれど、私はエントランスのパネルで部屋番号を押して住人に開けてもらった。

スピーカー越しに聞こえる『遅い！』という声だけで、やつの怒りが伝わってくる。私はエレベーターに乗っている間に息を整えた。

「はあ……ざりざり」

ちよつと早めに仕事が終わったから、今夜は一度自分の家に戻った。少し余裕をもって家を出てきたはずなのに、電車が遅れたせいで約束の時間に間に合わなくて。

だから、遅くなったのは私のせいじゃない！

エレベーターを降りると、住人はご丁寧にも私を出迎えるかの如く玄関ドアを開けて待っていて

くれた。

「か、上谷……ごめん！」

「いいから入れ」

上谷は、今夜は仕事から帰ったばかりなのか、ネクタイもほどかずにスーツ姿のままだ。一日の仕事を終えた後なのに相変わらず涼しげな風情で、慌てて走ってきた私とは大違いだ。

私はとりあえず洗面所に飛び込み、手洗いとうがいを済ませてリビングに向かった。

「電車が遅れたの！ 私はちゃんと余裕をもって出たんだからね」

怒られる前に言い訳した。

「だから俺はタクシー使えって言っただろうが！」

「だってタクシー代もつたいないもん」

「だったら俺が迎えにいくか、おまえのうちへ行く！」

「それは嫌っ！」

あんたが私の部屋へ来るとなると、片づけやら掃除やらしないといけなくなるじゃんか、と心の中で反論する。

でも今は、そんな口論は後回しだ。

「もうすぐ時間だよ。ぎりぎりだけど間に合ったんだから、いいじゃない」

座り心地のいいソファに腰を落ち着かせると、テーブルの上に用意された上谷のスマホが目に入る。

それは『儀式』の開始と終了を知らせる大事なアイテム。

上谷は、文句を言うのを諦めたように、はあっとため息をつき、私の隣に座った。

「今夜は、時間がくる前に始めるぞ」

「……えー」

往生際悪く、小さく反発してみた。

「検証は必要だ」

「……はい、はー」

私たちはこんな状況に陥った日から、あれやこれやと試行錯誤の日々を送っている。検証なんかしてもしなくても、結果は同じなんだけれど。

とにかく私たちは『儀式』を行わなければならない。

災いを回避するために――

上谷の大きな手が、私の頬に触れる。

それを合図に、私はそっと目を閉じる。

部屋の中がしんと静まり返り、私はほんの少し緊張してぎゅっと手を握り締めた。

何度経験しても慣れなくて、けれど何度も繰り返してきたから馴染み始めた行為。

柔らかな唇が私の唇に押し当てられた。

それからすぐに、かすかな口の隙間から、やつの舌がするりと入ってくる。

複雑な感情とは裏腹に、私はその舌を素直に受け入れて、自分の舌をそっと絡めた。

最初はささやかに、けれどだんだんと動きは速まっていく。私は唾液を味わうように舌を動かしながら、ゆっくりと溢れてくるものを呑んだ。

やつの舌の感触にも熱さにも動きにも慣れてきて、それに気持ちよささえ覚え始める。その頃には、最初にあつたはずの緊張は解け、体から力が抜けそうになった。

唇の柔らかさ、滑らかな舌の動き、混ざり合う互いの唾液の味。そういうものすべてに溺れていく。

時折、唇の角度を変えながら、スマホからのタイムアップの合図があるまで私たちはキスをする。今、私がキスを交わしているこの男は、会社の同期で天敵でライバルであつて――

決して恋人ではない。

なのに、夜毎キスを交わす。

長くて深い淫らなキスを――

## 第一章 これは試練の始まり

そもそもこのきっかけは先週末の社員旅行だった。

社員旅行……それは上司たちだけが楽しみにしている、それこそ若手社員にとつてはただの苦行。年々若手社員の参加率は下がっているのに（入社二年目までは強制参加だけど）いまだに中止にならない社内イベントだ。

社員旅行の幹事は入社四年目の社員が担当することになっている。つまり今年は私たちが幹事。今年の幹事メンバーには同期である上谷理都がいたせいで、参加者が増えて大変だったのだ。

上谷はどここの会社にも一人はいるだろう、若手有望株のイケメン社員だ。

さらりとした漆黒の髪。涼やかな目元と、低いのに甘く感じる声。品があり、何事にも落ち着いて冷静に対処する身のこなし。

女の子なら誰もが憧れずにいられません！ とは今年の新入社員談だ。

同期である私からすれば……完璧すぎて逆に胡散臭い存在だけだ。

その社員旅行に來た地で、『今夜はお祭りがあるんですよ』と教えてくれたのは旅館のスタッフだった。

私は社員旅行の事前準備担当だったので、当日を迎えるまでにすでに充分働いていた。だから

酔っ払い上司のお相手は宴会担当者と新人社員にお任せして、宴会を途中で抜け出してお祭りに向かったのである。食後のデザートでも食べるつもりで、友人でもある同僚と楽しく夜店を見て回っていたのだ。

神社で催もよほされているお祭りは予想していたよりも賑やかで、人も大勢来ていたし、お店もたくさん出ていた。

広い参道を照らす赤い提灯ちようとうちんに、設置された舞台から聞こえてくる笛の音。

浴衣姿ゆかたではしゃぐ、たくさんの人々。

境内けいんでは、パフォーマンスや、くじ引きなどのイベントも行おこなわれていた。

「あ、上谷だ」

「え？ じゃあ、あっち行こう。とりまきたちに絡やっかいめられると厄介やくがいだし」

上谷の姿を見つけたらしい友人のセリフに、私はすぐさま答えた。

あいつは旅館の宴会場で肉食系先輩女子社員に囲まれていたはずなのに、いつの間に拉致らちされてお祭りに来ていたんだろう？

ともあれ、上谷狙いの女子社員と関わるといろいろ面倒なことになる。避けるのが一番だ。

「いや、一人だよ。あいつうまく抜け出したんじゃない？」

さすが……仕事のできる男は女のあしらいもうまい。やつが一人でお祭りに来るとは考えられないから、連れてこられた後、はぐれたふりでもして逃げ出したに違いない。

「あ、違う、一人じゃない。あれ、小学生っぽい女の子を連れてる」

「え？」

私は思わず上谷の姿を探し、そして本人とぼつちり目が合ってしまった。

上谷は私たちに気づくと、まっすぐにこちらへ向かってくる。

「よかった。おまえら手伝てでんつて。この子、迷子らしいんだ」

紺地に金魚模様の浴衣ゆかたに黄色の兵児帯へこおびを結んだ女の子は涙目で「お兄ちゃん……」とぐずぐずぐずぐずと手を繋いでいるにもかかわらず、さらにシャツまで握にぎっているところを見ると、よほど心細こまいらしい。

お兄ちゃんとお祭りに来てはぐれて、お兄ちゃんに似た上谷すがに縫すがりついたのかな？

「迷子案内の場所があるだろうから聞いてくる」

私と一緒にきた友人がそう言って、すぐに動き出す。

私はぐずぐず泣いている女の子に、夜店でおまけにもらった髪飾りを差しだした。私には到底使えそうもない、かわいらしい髪飾りだったのでちょうどいい。

「あげる。一人で心細かったね。もう大丈夫だよ」

女の子は涙目で私が差しだしたものと、私を見た後、なぜか上谷を見上げた。もらっても大丈夫なものか、やつに確認するような眼差しを向けている。

その仕草はまるで、上谷のほうが信頼できると言っているみたいだ。

「もらえばいい。このお姉ちゃんより君のほうが似合う」

——悪かったな！ 似合わなくて。

女の子はおずおずと手を出して私から受け取り、小さく「ありがとう」と言った。涙目ながら嬉しそうにほほ笑む。

「ねえ上谷、この子に名前と年齢、聞いたの？」

「ああ、名前は——」

上谷が言いかけたのと、私のスマホが鳴ったのは同時だった。

電話に出るとそれは、友人からの迷子案内の場所を知らせる内容。そして私が話にとられていたところ——

「お兄ちゃん！」

上谷から手を離れた女の子が、いきなり駆け出していく。

その姿はすぐに人混みに紛まぎれてしまい、私と上谷は慌あわてて後を追いかけた。

「ま、待って！」

笛の演奏から和太鼓に変わり、どんつと大きな音が響き渡る。連続して鳴る音に、私と上谷の声はすぐにかきけされた。金魚模様の浴衣と黄色の兵児へこ帯を見失わないように走った。

兄の姿を見つけて追いかけているのかもしれないけど、私たちが見失えばまた迷子になってしまう可能性も高い。

私たちは女の子の後を追いかけて、参道から横道にそれる。

一気に周囲の明かりが減って、お祭りの喧騒けんそうから遠ざかっていく。

女の子は地元だから道を知り尽くしているのか、なぜか林の中にどんどん入り込んでいった。

むしろ今度は私たちが迷子になりそうだよ！

「広瀬！ 先に行く」

「……そうしてっ！」

くやしいけど、そう答えるしかない。

ヒールのある靴でこんなところを走るのが無茶なだけで、私の足が遅いわげじゃない！ と思いたい。

さらに奥にいくと、地面には切れた太い標縄しめなわが横たわっていて、私は一瞬ためらいつつもそこを進んでいった。

「お兄ちゃん、どこお」

背の高い木々に囲まれた中に、わずかなスペースがあった。その奥には寂れた小さな祠ほらがある。

その前で女の子は泣きながら立ち竦すくんでいた。

ようやく追いついた私を上谷が、どうしたものかと困惑した表情で見る。

この様子からして、お兄さんはいなかったのだろう。

誰かと見間違えて、追いかけてきちゃったのかな？

「君のお兄さんは俺たちが必ず探してあげるから」

珍しくふわりと柔らかい笑みを浮かべて、腰をかがめた上谷が言った。

うわぁ……こんな表情見せられたら、どんな女も落ちそう。

目の前の女の子でさえ例外ではなかったようで、泣きながら赤くなるという器用な芸当を見せてこくりと頷く。

その直後、上谷に近づこうとした女の子が、少し大きめの石に下駄をとられてつまずいた。それを庇うために、私と上谷は同時に飛び出す。

けれど、久しぶりに走ったせいで足がもつれて……三つ巴で倒れそうになる。

私と上谷はなんとか体勢を立て直すべく、二人同時に近くににあった祠の岩に手をついた。そのおかげで、女の子に怪我を負わせることは免れたけれど、岩をごろりと倒してしまい……

私たちが青緹めたのは言うまでもない。

その後、私たちは女の子を迷子案内に預け、その足で神社へと謝罪に向かう。

転がった岩は元の場所に置いたけれど、巻かれてあった標縄は切れていた。

寂れた場所にあった小さな祠でも、素知らぬふりをするわけにはいかない。

事情を知った宮司さんと現場へ赴き、「あまりお気になさらずに」というお言葉をいただいた私たちは、一応連絡先を渡して夜遅くに旅館に戻った。

翌日は近場の観光名所を巡った。そして帰る間際、宮司さんから慌てたように連絡があったのだ。あの祠にまつわる『儀式』について大事な話があると。

\* \* \*

その夜、私と上谷は神社の社務所内にいた。

隣同士に座った私たちの目の前にいるのは、この神社の宮司さん。

挨拶もそこそこに、彼は和綴じの古めかしい文献を私たちに見せながら力説する。

「あの祠はどうやら、ある儀式に使われていたもののように……。満月の夜に祠の岩を動かした男女は、次の満月まで毎日接吻をする、それが儀式の内容です。その試練を乗り越えた二人はよき伴侶になれるとあります。昔はこの儀式を行ってから祝言をあげていたようなんです！」

目が細すぎて開いているのか閉じているのかわからないけれど、驚きと興奮員公口だけは伝わってきた。けれど、私はなにを言われているのかすぐには理解できなくて、隣に座る上谷をちらりと見た。

座布団の上で胡坐をかいている上谷は、眉根を寄せて思案している。その横顔は凛々しく、こんな時でもイケメンはイケメンぶりを如何なく発揮しているようだ。

ぼかんと口を開けて思考停止している私とは大違い。

私は意識して慌てて口を閉じると、目の前の宮司さんへと視線を戻す。

「さらに！ 祠の岩を動かした時間と同時に接吻しなければ災いが起こるのだと、この文献には記載されているんです！」

ほらここ！ と言わんばかりにさらに文献を差し出されたけれど、へびみたいな崩し文字を即座に解説できるわけではない。

「毎晩、同じ時刻に接吻しなければ災いが起こる——ですか？」

上谷は丁寧な口調で宮司さんの言葉を繰り返す。

さつきから「接吻、接吻」って言っているけれど、つまりはキス——

私にはなにがなんだかわかんないんだけど、頭のいいこの男なら理解できるんだろうかと思って、また隣をちらりと見た。

やつは、会社での冷静な態度と変わらず落ち着いているように見える。

私の視線に気づいたのか、ふと男も私を見る。

——接吻だって。

満月の夜だって。

祠の岩と一緒に動かした男女は毎日同じ時間に接吻する儀式って、なにそれ、おまじない？ ファンタジー？

ばかばかしい。

だいたい私たちは祝言をあげるような仲でもなければ、恋人でもない、ただの会社の同期だよ！ しかも、どっちかっていうと同期のわりに親しくないほうだよ！

儀式なんて、私たちには関係ないよね？

——といった内容を心の中でぶちまけながら、とりあえず上谷に向けてたっぷり笑ってみせた。

「私……宮司さんのおっしゃっていることが理解できないんだけど、あんたできる？」

上谷は私を軽く睨んでから、不本意そうに表情を歪めた。

「言っている内容はわかる……だが、俺にも理解できん」

「わかってください！ お二人に関わることなんですよ！ 昨夜はちょうど満月だったんです！

祠の岩を動かしてしまったお二人は、これから約一ヶ月、同じ時間に接吻しなければ災いが起こるんですよ！」

確かに昨夜は満月だった。都会で見る月よりも、はつきりと大きく綺麗だったので、よく覚えてる。

そして上谷と私はこの神社の隅っこにあった小さな祠の岩を動かしてしまった。その場所はどうやら立ち入り禁止区域だったらしい。

あの場所に入り込んでしまったのは事情があったからだし、儀式に使われる大事な岩を動かしたことは申し訳ないと思う。

でも……ひっそりと寂れた場所にあった岩に、そんな重要な役割があるとは思えなかったけど。存在さえ忘れられたような小さな祠だったよ！

「災いとは、どういったものなんでしょう？」

ふたたび落ち着いた口調で、上谷が静かに問うた。

「文献には……災いとはしか書かれておらず、また災いの内容は人それぞれだったようです。わかっているのは人の弱き部分……要はストレスのかかりやすいところに災いが起こるとしか……」

宮司さんは、細い目をますます細くして困ったように言った。

「どうやらこの宮司さんはまだ経験が浅いようで、さらに頼みの綱の先代は、認知症で施設に入所しているそうだ。」

ま、つまり詳しいことは誰にもわからないってこと。



私がそんなことを考えているうちに、上谷はさらりとこの場をまとめてしまう。

「幸いというか、あと数分で昨夜岩を動かしたと思われる時間がきます。その文献に書かれていることが本当なら、俺たちの身になにか起こるし、なにもなければ、伝承にすぎなかったと考えればよいのではないですか？」

私は内心パニックだけれど、それをこの男の前でさらすのはプライドが許さない。

だから、わかったふりをして深く頷いて同意した。

宮司さんは「いや……でも、文献には……」と、しどろもどろで言うけれど、本人も確証がないから強く言ってはこない。

タイムリミットが迫っている時計を見て、口を結んだ。

祠の岩が何時に転がったのかはつきりとはわからない。でも午後九時前だったことは確かだ。

だからこうして私たちは、その時間がくるのを待っているんだけど……

「それでは、お二人は接吻はせずに、時がくるのをお待ちになるんですね」

「俺たちは会社の同期なだけで、文献にあるような関係はありません。不確かな状況で恋人でもない女性に、その……接吻するわけにはいきませんから」

私は、はつとする。

宮司さんからあまりにもファンタジーな内容を聞かされて頭から抜けていたけど、上谷には恋人がいるんだよ！ 女子社員が騒いでいたもん。この男が研修から帰ってくるのを待っていたのに、ちゃっかり彼女の座を研修先の女にとられたって！

上谷の恋人については、年上の仕事のできるキャリア女性だとか、癒し系のふんわりキュート女子だとか憶測だけが飛び交っていた。

「私も恋人でもない男性とキスするのは嫌です」

「ですが……お二人はこの地にご旅行に来られたんですね？」

「社員旅行です！」

「では、恋人同士ではない？」

「はい」

私も上谷も、声をそろえて負けじと否定する。

すると宮司さんは不安げに呟いて、柱にかかっている時計へと視線を向ける。

「恋人同士でない……なら、大丈夫なんでしょうか？」

午後九時前後になにも起こらなければいいのだ。

私たちは緊張しながら時がくるのを待った。

そして現在——午後九時……二十秒経過。

「なにも起きませんね」

「大丈夫そうですね」

「起きないようですね……ですが」

上谷、私、宮司さんが順に口にした。

私は肩から力を抜いて、ほっと息を吐く。  
ほらねー、やっぱり迷信だよ。

キスしなきゃ災いわざわが起こるなんて迷惑だし、その儀式とやらにどういう意味があるのかもよくわからない。

次の満月まで毎日キスするぐらい、結婚予定の恋人なら楽勝なんじゃないの？

どこが試験なんだか。

「文献に書かれていたことは……祝言しゅげんを滞りなく行うために災いわざわが起こると思わせたかったのかもかもしれませんし、祠ほらに近寄らせないためもあったのかもしれない。なにも起こらなかったことを、よしとしましょう」

やっぱり上谷がさらりとまとめた。

文献の真偽には触れず、さらっと流したよ。

「そう、ですね……何事もないのが一番ですね」

宮司さんは安心したような不思議に思っているような微妙な顔をしながら呟いた。

「こちらこそ、ご迷惑をおかけしました。いろいろ調べてくださり、ありがとうございました」  
うんうん。

元はといえば私たちのせいだし、丁寧に文献を調べてくれた宮司さんには感謝だよ。

今回のことで唯一わかったのは、上谷に近づくほどロクなことがないということだ。

私にしたなら貴重な週末を、一泊二日の社員旅行と文献検証に費やす羽目になったこと自体が試験

だよ。

ずっと正座していたから足も痺れちゃったし。

——座布団から立ち上がって、お暇いしよましようとした時だった。

「待て。広瀬」

「んー」

「まだ九時になっていない」

いや、時計はもう九時を回っているじゃん。なに言ってるの？

そう思いつつ、上谷が私の目の前に自身のスマホを差し出す。

そこには午後八時五十七分と表示されている。

「あっ、そういえばこの社務所の時計は、三分早く設定していました!!」

はあ？ なにそれっ!!

「す、すみません！ 気が動転どうてんしていて、すっかり忘れていて」

私は壁の時計と、上谷のスマホを見比べた。

壁の時計の秒針が、ちょうど十二の位置にくる。上谷のスマホも数字が変わる。

スマホの表示を信じるなら、時刻は——

午後八時五十八分。

その途端、ふっと息が苦しくなった。

さっきまでと同じように呼吸をしているつもりなのに、酸素がとり込めない。

吐くことはできるのに、うまく吸うことができないのだ。

まるで水の中にいるような——感覚。

「本当にすみません!!」

宮司さんが恐縮したように頭を下げ、上谷が穏やかに対応している。

「大丈夫ですよ。九時まであと数分のですから、もう少し待ってみましょう」

——え？ 呼吸がおかしいのって私だけ？

自分の勘違いかもしれないと、もう一度息を吸う。

でも入ってこない。

私は、はっ、はっ、と短く息を吐き出した。

まるで過呼吸のようだ。

「広瀬？」

私はぎゅつと胸元を掴んだ。

自分の身になにが起きたのかわからなくて、心臓がばくばくしている。

息が苦しくて、私は体を丸めた。

「広瀬！ 広瀬！ どうした！」

「あの！ どうされました？ どこか具合でも悪くなったのですか？」

焦る上谷の声と、おろおろした宮司さんの声が聞こえる。

私の体を支えて、上谷が顔を覗き込んできた。私は息が苦しくて、言葉を発することもできない。

なんで！ なんで息ができないの！ 病気？

酸素！ 酸素ちょうだい！

なんでいきなりこんなことになったの!?

それとも、まさか、これが——!!

「広瀬！ 息ができないのか？」

私は涙目になりながら、とにかく頷いた。

水の中じゃないのに溺れているようで。でもそんな自分の状況さえ伝えられない。

「まさか、これが災い!？」

「災いとか言ってる場合じゃないでしょう！ こんなのに！ 下手したら彼女の命が危険だ」

「じゃあ、救急車ですか!？」

「わからない！ わからないけど！」

上谷が声を荒らげている。

会社ではどんなトラブルが起きたって、いつも冷静で悠然としている男の珍しい姿だ。

「災いを回避する手段はキスでしたね……キスすればいいんですよね！」

「え？ はい、あの、でも」

「それでダメなら救急車を呼んでください。広瀬、緊急事態だから！ ごめん！」

うん！ もうなんでもいいよ！ 息ができるなら！ だって苦しいんだもん！

苦しい！ 苦しいよ！

息ができないのに口を塞がれるなんて変な気もするけど！  
もうなんでもいい！

上谷の手が私の頬に触れ、そしてそつと唇が合わさった。  
それは一瞬のささやかな触れ合い。

キスとも呼べないような唇同士の接触。

上谷とキスするなんて思いもしなかった。

でも——息はできるようにはならなくて、私は口をばくばくさせるだけだった。  
なんで!?

「キスすればいいんじゃないですか！ なんの変化もないじゃないですか！」  
そうだよつ！

「あ、いや、えーと……接吻せつぶんによる体液の交換。そう、文献には体液の交換とあります！」  
ほら、ここっ！ と見せられても、そんなの確認する余裕はないよつ。

「はあ？ それを早く言ってください!!」

なんでもいいから！ 救急車を呼ぶなり、助けるなり、早くして！

でない……息が苦しくて視界が……もう。

意識がブラックアウトしかけた時、上谷にぎゅつと体を抱きしめられる。唇にふたたび柔らかい  
ものが触れて、口内になにかが侵入した。

ぬるりとした感触を受け入れると、鼻からすつと酸素が入ってきた。

どうやらこのぬるりとしたものに触れている間は、息苦しくならないようだ。

私はもつと楽になりたくて、口の中に入ってきた柔らかいものを飴玉あめだまのように舐め回す。

するとやはり、だんだん息がしやすくなってきた。

濡れかけていた水の中から、ようやく助け出された気分。いや、濡れた経験はないけど。

やつと息ができる。酸素が入ってくる。

それでもまだ落ち着かなくて、必死でそれを舐めた。舐めていると、鼻からどんどん酸素が入っ  
てくるのだ。

肺を酸素で満たしたくて、私は飴玉を舐めた。飴玉にしてはやかに柔らかくて時々、意思を持っ  
ているように逃げていくけれど、必死にそれを追いかけた。

ダメだよ！ まだ足りない。呼吸が落ち着かない。

ものすごく苦しかったんだから、あんな目にはもうあいたくない！

舐めているうちに溢れてくる唾液を、こくんこくと呑む。

鼻での呼吸が落ちてきて苦さが和らぐと、私は舐めても舐めても小さくならない飴玉を逃  
がしてあげた。

うーん、飴玉というよりグミかな、なんてことを考えながら。

そうして目を開けたところ、至近距離にイケメンのドアップがあった。

驚いて思わず瞬きをする。

涙目でぼやけていた視界に不安げな上谷の顔があつて、私は嫌な予感を覚えながらも「かみ、

や？」と呟いた。

なぜか舌つたらずな口調になった。

「大丈夫か？ 息は？ 苦しくないか？」

気づけば上谷の腕に支えられていて、私はゆっくりと体を起こす。さっきまでの苦しさが嘘のように、呼吸が楽だ。

「広瀬。大丈夫か？」

確かめるように少し強い口調で聞かれる。

「う、ん。大丈夫」

「……よかった。焦った」

「よかった……よかったです」

宮司さんの涙声を聞き、私は今ここがどこで、どんな状況だったかを思い出した。

「本当によかったですー。もう少しで救急車を呼ぶところでした」

そうだ、ここは神社の一角。

床にはさっきまで宮司さんが大事に抱えていた文献が落ちている。

理解できなかった文献の内容の一部が、嫌でも理解できた。

災い……そして、接吻。

「……祠のせい、なの？」

あの伝承はファンタジーじゃないの？ ただの迷信じゃないの？

「信じたくないけど……可能性はある」

上谷が神妙な顔つきで呟くから、真実味が増した気がして嫌になる。

「キス……した？」

「キスというか……接吻による体液の交換だ、察しろ」

ああ、ただ単に唇を合わせただけじゃダメってことか。

つまり、デーブキス……

え、次の満月まで毎日同じ時間にデーブキスをしろってこと？

よりによって上谷と!?

「今日は広瀬の体調がたまたま悪くなっただけなのか、祠の災いのせいなのかは、明日も同じことを試せばわかる。検証——するか？」

「検証する意味はある？」

「……わからない。現時点で確かなのは——おまえが呼吸困難を起こし、それが接吻で落ち着いたということだけだ」

そう。

この出来事が災いのせいなのかどうかは、わからない。

上谷の言う通り、救急車を呼ぶことなく落ち着いたのはこいつのキスのおかげ。

それは確かな事実。

「次の満月まで毎日同じ時間に接吻を交わせば、災いは消えるはずですよ」

宮司さんは文献を手にとると、どことなく朗らかな声でなんでもないことのように言った。

私と上谷は顔を見合わせて、互いに深くため息をつく。

午後八時五十八分。

それが、私たちがキスをしなければならぬ時間。

こうして次の満月まで毎晩、私たちは『儀式』を行う羽目になったのだった。

\* \* \*

『今夜どうする？』

『どうするってなにが？』

『待ち合わせ場所と時間だ』

『考えとく』

メッセージの字面だけ見れば、恋人同士のやりとりにも見えなくはない。

私の心情は、ものすごくそこからかけ離れているけど。

「珍しいー、真雪がスマホを手放さないなんて」

昼食のトレイを手にした友人の南環奈が目敏く見つけてきた。

週はじめの月曜日、今日の社食の日替わりメニューは鉄分補給ランチのようだ。

私はミニバッグにスマホをそそくさと放り込む。

エだ。

実際、入り口は別だが社員以外の一般の人も利用可能となっている。メニューも豊富でコスパもいいのでランチタイムは盛況だ。

「それで、神社のほうは大丈夫だった？」

「そうだよ。」

環奈だつてあの場にいたのに、一人迷子案内を探しにいたりするから、私が……

八つ当たりしたくなつたけど耐える。今は正直それどころじゃない。

「まあ大丈夫と言えは大丈夫で、大丈夫じゃないと言えは大丈夫じゃない」

「なにそれ」

環奈は「いただきます」と手を合わせると、ひじきの煮物に箸をつけた。

「あのさ、男女が二人きりになれる場所ってどこ？」

「そう、目下、急を要する課題はそれだ。」

私は今夜八時五十八分に、上谷とキスをしなければならぬ。それもデーブキスだ。

一応、今夜二人で再度検証予定だけれど、それをどこで行うかが問題だった。

——冷静に考えるという大変なんだよ。

「んー、互いの部屋か、そういうホテルじゃないの？」

ランチタイムであることを考慮して、環奈が小声で答えてくれる。

「そうだよね。部屋かホテルが一番安全だとは思う。」

でも上谷を部屋に呼びたくもないし、自分も行きたくない。ホテルなんて、もつてのほかだ。

「なに？ 男と逢引あひびきでもするの？ えー、真雪いつの間に彼氏ができたの？」

「違う。そういうわけじゃない」

「ふーん。あー、学生時代はデートにカラオケボックスとか使っていたかな」

カラオケボックス！

いいこと聞いたと思っただけど、それは顔に出さないようにした。

有能な秘書様に気づかれると面倒なことになる。絶対、おもしろがられる！

次の満月まで毎日同じ時間に上谷と接吻せつぱんしなきゃいけないようになったなんて……絶対知られるわけにはいかない。

環奈は総務部秘書課、そして私は企画部、上谷は営業部だ。

当然、仕事が終わる時間はそれぞれの部で違う。

だから午後八時五十八分という時間は、私にはかなりネックだった。

私は残業がなければ大抵その時間は家で寛くろろいでいる。夕食とお風呂を終えてドラマを見たり、インターネットをしたり、時には晩酌ばんしやくしたりしている時間だ。

なのに今日から一ヶ月は上谷と会うために、また外に出なければならぬ。

それが次の満月まで毎日続くのだ。残業とか出張とか……なにより週末をどうするのか。

考えれば考えるほど、宮司みやうじさんの言っていた「試練」という言葉の意味が身に染みてくる。

「試練」だよ！ まさしく。

そのあたりのことも上谷とは相談する必要がある。

「そういうえば、気をつけなさいよ。社員旅行で真雪と上谷が一緒に消えたって噂うわさになっているから」

社員旅行中のトラブルだったから、上司に説明しておく必要があった。そのため、二人で外出したことをみんなに知られたのだろう。もともと、真実は迷子への対応をたまたま二人でしただけなのだけれど、相手が上谷であったせいで勘繰かんぐられてしまう。

あいつって、やっぱり私にとって疫病神やくびょうがみ!?

「面倒くさい。あの男と関わると本当に嫌きらなことがない」

「真雪は上谷に近づかないようにしているわりには、なにかと関わっちゃうねー。因縁いんねんでもあるのかな」

何気ない環奈の言葉に私はごほごほむせながら、否定した。

「因縁いんねんなんていらぬー!!」

\* \* \*

その夜、私は約束の時間より少し早めにカラオケボックスに入った。

一度家に帰って食事を済ませ、ラフな格好に着替えてやってきた。お店の人には後から人が来ることを伝えて先に部屋に入る。

テーブルの上のマイクを見ると、カラオケする気分じゃないけど大声で歌いたくなる。いや大声で叫んでやりたい。

私はウーロン茶を頼んでから、テーブルの上にプリントアウトしたカレンダーを広げた。

このカラオケボックスは私の住むマンションの最寄駅のすぐそばにある。上谷に待ち合わせ場所をカラオケボックスにしようと思案した時、あいつがこの駅を指定したのである。

会社近くは避けたいし、互いの住んでいる場所の中間地点には残念ながらもなかった。結果、時間帯を考慮して、私が行きやすい場所にしてくれたのだ。

そういうところ、やっぱりできるんだよね……

同期だから、私はあの男の優秀さを知っている。

でも同期だからこそ、その優秀さが嫌いだ。

新入社員研修のレポート発表の結果は、上谷がトップ、私が次点だった。

二年目の研修企画案も上谷のが採用されて、私は落選。

三年目を実施される、地方や海外を回る半年間の研修参加は出世コースに乗るための必須条件のようなもので、キャリアアップを目指す私には大事なものだった。

それだって、選ばれたのは上谷だ。

私にとって目の上のたんこぶのような存在、それが上谷理都だった。

環奈なんかは『上谷をライバル視するなんて真雪ぐらいだよ』と言うけれど、いつも目の前をちらちらされれば誰だっとうざいはずだ。

因縁があるなんて否定したいけれど、事実なにかと因縁がある。

今回の件はその最たるものだ。

よりによって、上谷とキス！ 違った。接吻による儀式！

憂鬱でたまらない。

「とりあえずしばらく出張は入らない。大きな企画が終わったばかりでよかった。残業も調整ききそう。問題は……ここだよ」

私はカレンダーに次の満月までの自分の予定を書き入れていた。

憂鬱だらうがなんだろうが、対策は練る必要がある。

ここに上谷の予定を加えてもらって、どうやってこの期間を乗り切るかを考えないといけないのだ。

儀式の期間が終わるはずの最後の週末に、私は学生時代の友人との温泉旅行を予定していた。

なかなか予約の取れない高級旅館で、半年前の予約開始日の開始時間すぐに電話を入れてようやく確保した宿なのだ。

この旅館をキャンセルするのは嫌だ！

「ここは上谷と要相談ね」

あとの週末は、悲しいほど特に予定はない。



恋人のいない二十六歳の女子なら、きつとみんなこんなものはず。

「悪い。遅くなった」

軽いノックと同時に上谷が扉を開けて部屋に入ってきた。

「お疲れー」

「……広瀬、家に帰ってからきた？」

「夕食も済ませました。そういうあなたは今まで仕事？」

上谷はまだ会社仕様のスーツ姿だ。手にはビジネスバッグを持っている。

「ああ」

「夕食は？」

「食事は済ませた。おまえもスケジュール確認していたのか。こっちは俺の」

「ん、記入するね」

あまり認めたくないけれど、私と上谷はたぶん感覚が似ている。

新入社員研修でもこの男と同じグループになったことがあって、その時にも思った。

合理的に無駄なく効率よく行動したい性格……なぜならそのほうが楽だから。

——っというか、考えても無駄なことに頭を使いたくないんだよね、たぶん。

上谷はスーツの上着を脱ぐと、私と同じようにウーロン茶を注文して、それから椅子に座った。

そしてテーブルの上にごつい腕時計と、ストップウォッチとスマホを並べて置く。

「なに、これ」

「電波時計仕様の腕時計。それから……まあそういう時間がどれだけ必要なのか計るためのストップウォッチ。スマホもタイマー設定してある」

仕事ですぎだよ、上谷。

気が回ると褒めるところなんだろうけど、できすぎていてなんか嫌……

「本当に祠ほこりのせいだと思っ？」

こうしてスケジュールを確かめてはいるものの、正直私はまだ疑っていた。

「おまえは今夜も検証する気？ 儀式をしないと息ができなくなるかどうか」

「する。だってありえないでしょう！ ファンタジーじゃないんだよ！ なんであんな岩に、そんな

力があるのよ！ 昨夜のだって偶然……だと思いたい」

う、語尾が小さくなってしまった。

「俺はいいよ。もしかしたら今夜息ができなくなるのは俺かもしれないし、なにも起こらないかも

しれない。俺だって正直、混乱している」

「冷静にこんなもの準備しておいて!？」

「備そなえあれば憂うれいなしだ」

なんか違うー。

「広瀬、おまえ彼氏いるの？」

「はあ？ あんたにそんなの関係ある？ と普通なら言っているところだ。

でも、今の状況ではどういう意味で聞かれているかはわかる。」

「いない！ あんたは……いるんだよね？」

噂は聞いている。でも真実かどうかは不明だ。いつもならあえて確かめたりしないけど、今回に限っては聞かないわけにいかない。

「ああ、いる。噂は聞いているんだろう？ 遠距離だけど——」

ああ、やっぱり噂は本当だったか。

上谷は少し前まで半年間、各地の研修先をぐるぐるまわっていた。

そこで恋人まで作ってけるとは……やっぱりむかつく！ リア充爆発しろ！

「どうするの？」

「なにが？」

「もし……その、毎晩アレしないといけなくなって、その……彼女に説明」

上谷相手にキスとか接吻とかいう単語を言いたくなくて濁す。

でも、きつとそこは重要なところだ。

「おまえが彼女ならどうしてほしい？ 祠の岩の災いのせいで次の満月まで他の女と毎晩キスしなければならなくなった。そう正直に聞かされたいか？」

私は想像してみる。もし自分の彼氏が同じ立場になったとして、正直に話してほしいかどうか。

たとえそこに気持ちがなくても、災いを避けるためだとしても、自分以外の女とキスをする。

それもディープキスを毎晩だ。

仕方がないって割り切れる？

知らされたほうが、むしろ不安になるんじゃない？

遠距離だったらなおさら……きついんじゃない？

でも、彼女に内緒で他の女にキスするの？

それって浮気じゃないの？

え？ もしかして私が浮気相手？

バレたら刺されたりするんじゃない……

「……期限があることなら、知らないほうがいい、かも」

保身も兼ねて、私は卑怯な答えを口にした。

かなりずい考え方だけど、こういう状況だとなにが正解かなんてわからない。

「俺も、できれば言いたくない」

上谷がふと視線を落として物憂げに呟く。

この男は確かにモテるけれど、とつかえひつかえ女遊びするタイプじゃない。新入社員研修の時も確か大学時代から続いている彼女がいると言って、周囲を牽制していた。その彼女と別れたらしいって噂が広がった後は、猛者たちにアプローチされて騒がれているいろいろ大変そうだった。

私は当時、この男には恋人がいてくれるほうが、周囲も巻き込まれなくて助かると思ったものだ。

——彼女に伝えれば……私たちの罪悪感は軽くなるかもしれない。

けど、彼女にしてみたら、ただ不安になるだけだ。

「第一こんなこと話して信じてもらえらると思えないし、事情がわかったからって納得できるもの

でもないだろう。卑怯だと思っか？」

「他人事なら卑怯って言いたいけど……今回はわかんない」

私はウーロン茶をストローでずっと飲んだ。あえて音をたてたのは、この場の空気を変えたかったから。

「ところで上谷はこれからの一ヶ月、出張とか週末の予定とかはなにもないの？」

渡されたスケジュールは仕事のものばかりだ。こいつは営業部なので夕方からの打ち合わせがいくつか入っていた。でもタイムリミットには間に合いそうな時間帯だ。

「出張は今のところ予定はない。入らないよう交渉する。仕事も調整して残業時間はコントロールする。週末は二週目に……会う予定だった」

ああ、遠距離の恋人に会う予定——それは大事だ。私の旅行と同じぐらい。

「久しぶりに会うんだよね？ 会いにいくほう？」

「ああ」

「んこ。」

「京都」

それはまた……気軽に行けないところですね、上谷くん。

「もしかしてキャンセルするつもりとか？」

「そうせざるを得ないだろう」

え？ 久しぶりの恋人との逢瀬をキャンセルするの？

もしかして私も旅館をキャンセルしないといけない？

「なんか方法ない？ せっかく恋人と会うんだもん。その時間帯だけ少し抜けて……ほら、彼女をこっちに呼ぶとかさ。あ、なんなら私が京都に同行してもいいよ」

懐具合は寂しくなるけど、できなくはない。互いに協力は必要だろう。

「それで……この四週目の週末のおまえの旅行先に、俺もその時間だけ行けばいいわけ？」

上谷が私がカレンダーに書き入れたものを見て、呆れたように言った。

私が譲歩した理由をそこだと見抜くあたり、やっぱり鋭くて嫌なやつだ。

「恋人と過ごしているのに……この時間だけ抜けるのか？ しておまえとキスをして、また何事もなかったように恋人に会うのか？ おまえ、そんなことできる？」

口調に蔑みも混じり始めて、私はぶんぶんと首を横に振った。

恋人とのデート中に抜けて、他の女とキスをして、素知らぬふりをして戻るなんて、どこの最低な二股野郎だ！ ですね。

それに午後八時五十八分なんて、恋人と優雅にディナー中か、下手したらいちやつきタイムの最中だろう。

「今夜の状況次第で——考える」

「そうだね」

気づけば、スマホの時計は問題の時刻の三分前を示していた。

「本当にもう一度検証するんだな？」

「する」

「キスするんじゃない、もう一度様子を見るんだな？」

「そうだよ」

昨夜はたまたま私の体調が悪くなっただけかもしれないでしょう！

儀式の話を聞いた後だったから、キスで楽になった気がしただけかもしれないし！  
なにも起こらない可能性に、一縷の望みをかけたい。

「昨夜みたいに苦しむのはおまえかもしれないんだぞ、いいのか？」

「今夜は上谷かもよ」

「……その場合、おまえから俺にキスすることになるな」

私はじろつと上谷を睨む。キスするのもしられるのも避けたい相手なのだ。

どちらにしろ、試練だよ。まさしく！

上谷が腰を浮かせて私の隣に座った。

「なんでっ！」

「離れていちゃキスできない」

「キスキス言わないでよ！ あーもう、なんだってこんなことになったのよ！」

——あの夜は本当に、とても綺麗な満月だった。

夜空にぼっかり浮かぶ丸い月。

空気が澄んでいたせいか、銀色の輪郭がくつきりしていて、環奈と一緒に『綺麗だねー』って

言った。久しぶりに夜空なんか見上げたよって笑った、いい思い出だったのに。

なのに！

ブブツとスマホのタイマーが、その時間を示す。

瞬間、私はやっぱり酸素を吸えなくなった。

「広瀬！」

なんで！

なんで私だけが苦しくなるの？ なんで上谷は平気なの？

「広瀬！ やっぱり息ができないのか!?!」

上谷の言葉に、私はなぜか反射的に首を横に振った。そして思わず上谷から距離をとる。

やだっ！ やだよっ！

昨夜は急なことに驚いて苦しくて、だから藁にも縋る気持ちで上谷のキスに応じた。

でも今夜は違う。

昨夜のようなキスが必要だって知っていて、冷静にその時間を待っていた。今からどんなことを

するか、容易に想像がつかってしまうのだ。

唇が触れる程度のキスならまだ耐えられる！

でも顔見知りとはいえ恋人でもない男と、それも彼女のいる男とあんな深いキスをするのはやっ

ぱり抵抗がある。

「やっ！」

かすかに声が漏れた。でもそれ以上は、私は息が苦しくてなにも言えない。

「広瀬！」

私は泣きそうになりながら、首を何度も横に振って拒否を示した。

「広瀬！ 嫌なのはわかる。でも、このままじゃおまえ——」

なんで、なんで！

なんで上谷は平気そうで、私だけがこんな目にあうの！

災い（わざ）が降りかかっているのは私だけじゃない！

ぐいっと腕を引かれて、私は上谷に強く抱きしめられた。逃げたいけど、息が苦しくて動けない。

「広瀬、ごめん！」

上谷は片手で私の頭を支え、息のできない私の唇を塞いだ。

その瞬間、鼻から酸素が入ってくる。

昨夜よりは冷静に、私は上谷の舌を自分の口内に受け入れていた。

少しゆっくりと優しく探る動きで、私はこいつの戸惑いを感じ取る。

キスをされるほうも嫌だけど……するほうも嫌なんだよね。

恋人でもないただの同期の女に、舌を絡めて唾液（だえき）を与え合うキスなんて本当ならしたくないはずだ。

だからか、上谷はすぐに私から唇を離れた。

離れた途端……私はまた息が苦しくなる。

「広瀬……息できるか？」

——あれぐらいの短時間のキスじゃダメみたいだよ、上谷。

私は肯定も否定もせず、ただ上谷を見つめた。

「やっぱり、か。広瀬……楽になったら教える。それまでキスを続けるから」

上谷はストップウォッチを操作して、ふたたび私の唇に覆いかぶさる。私はもう抵抗する気力も失せて、体から力を抜いた。

舌を絡めることで唾液（だえき）が行きわたるのか、その間は鼻呼吸ができる。

でも少し離れられるときつくなって、私は仕方なく自分から上谷に近づいた。

口で楽に呼吸ができるまでは、どうやら上谷のキスが必要なようだ。

長いのか短いのかわからないキスをして、落ち着いた頃、私は上谷の胸をそっと押して離れた。

きちんと息ができることに、ほっとする。そして唾液（だえき）で濡れた唇を拳（こぶし）で拭い、テーブルの上につぶした。

やっと呼吸が落ち着いた安堵（あんど）の上に、惨めさと羞恥（しゆうぢ）が積み重なっていく。

とりあえず疲労困憊（けんぱい）。

時間をおかないと、上谷の顔を見るのももう嫌だ。

「……約一分」

上谷が、ぶっきらぼうに告げた。

キスの時間としてそれって短いのか？ 長いのか？ いや恋人同士なら、あつという間かもね！

「広瀬、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない。いろんなものが削られた」

そう言うのと、ぼんぼんつと優しく私の頭に触れる手があった。

むかつく、むかつく！ なんだって私が上谷なんかにも慰められなきゃならないの？

なんでこんなことになっちゃったの!!

改めて祠の災いとやらを認めざるを得なくて、それは昨夜より深く、私の精神をがりがりと削る。

「どうやら、信じたくはないけど祠の災いは本当のようだな」

うん。そうだね。そして苦しくなるのは私だけみたいですね。

私は、じとつと上谷を睨んだ。この男のせいじゃないけれど恨みたくなる。

——満月の夜、祠の岩を動かした男女は次の満月まで毎晩キスをする。

そうすればよき伴侶になれる。

つまりはよき伴侶になるための『儀式』だ。

恋人同士の男女にとつては……試練とはいえ楽勝な『儀式』なのかもしれない。

でも私たちにとつては、はた迷惑な『儀式』だ。

「それで、こうして毎晩カラオケボックスで待ち合わせする気なのか？」

私が落ち着いた頃を見計らって、上谷がそう切り出してきた。

「他にどこかある？」

私は投げやりに聞いた。

こんな中途半端な時間に、約一分ほどのディープキスをする場所が他にある？

会社？ ホテル？ 公園？

「おまえの家は？」

「却下！ 絶対嫌！」

「じゃあ、うちに来るか？ 俺が広瀬の家に行くほうが負担にならないと思っただけ。俺はどっち

でも構わない」

「どっちも嫌！」

上谷は会社の同期だ。プライベートでの私たちの関わりは一切ない。

そして今後も、私はあまり上谷と深く関わりたくはないのだ。

大半の女の子たちは上谷に近づきたいようだけれど、私は違う。

「あんた恋人がいるんでしょう！ 恋人以外の女を自分の部屋に連れ込むんじゃないわよ！ 私

だって、ただの会社の同期を部屋に入れたりしたくない」

「広瀬……冷静に考えろ。毎晩お金を払ってカラオケボックスを使うのか？ キスのためだけに短

時間借りる客が毎晩来るんだ。どんな噂をたてられるか、わからないぞ」

「なんであんたはそんなに冷静なのよ！ わかっているわよ、そんなこと。お金だつてもつたいな

いし、毎晩来ればおかしな客だつて思われる。どっちかの家が一番安全だとも思うよ！ でも、で

も……」

上谷はじつと私を見た。

本当に、こんな状況になっても落ち着いて冷静に対処するこいつが腹立たしくてならない。

そして私はこの男のキスがないと、おそらくこれから次の満月まで毎晩苦しい思いをするのだ。それもくやしーい！

「広瀬が俺に対して……まあ、あまり好意的な感情を抱いてないのは知っている。俺だって冷静なわけじゃない。こうなった今でも災いのことを信じ切っていない部分もある。だが現実、この時間におまえは二晩連続で呼吸困難に陥った。だったら、できうる対処を考えるべきだ」

そう、私があんたに対して好意的でないことには気づいていたんだ……と思った。けれど、そこはスルーする。

そして、くやしーいことに、この男の言ったのが正論だということもわかっている。でも理解できるのと、感情は別なんだよ！

「私の家は嫌」

「行き帰りの負担を考えると、おまえの家が一番いいんだぞ。……まあ、でもわかった。場所は俺の家にしよう」

上谷はそう言うと、ビジネスバッグから住所を書いたメモと自宅のものらしい鍵を取り出した。用意周到にもほどがある。

ていうか、これは超プレミアな鍵だよ！ だって上谷の家の鍵！ オークションに出せば高く売れそうな代物だよ。

実は私は、男の家の鍵を手にするのは初めての経験だ。

その相手が上谷になるとは誰が想像しただろう。掌のひらにのせられたそれを、じつと見てしまう。

「私に鍵を渡すつてことは、勝手に入っつていいつてこと？」

「ああ。なにかあつた時に慌てたくない」

ふうん、こいつはいつ他人に部屋を見られてもいい状態なんだ。私は無理。汚くはないと思っつてど散らかつてゐる。

「恋人と鉢合わせしたらどうするの？」

「彼女には渡してない」

その言葉に、私はどつと疲れを感じた。

今回の件での一番の被害者は、きつと上谷の恋人だ。

彼氏の部屋の鍵はよく知らない女に渡り、さらに次の満月までの約一ヶ月その女と毎晩キスをする。

「ごめん……彼女に申し訳ないね」

私が悪いわけじゃないけれど、それでもうしろめたさがじわじわと襲つてきた。

「今回の件は、誰が悪いわけでもない。事故みたいなものだ。当事者の俺たちだつて納得できない、わけのわからない状況だ。だからおまえが気にすることはない。それに……」

上谷はそこで口を噤むと、眉根を寄せて考え込む。

「それに？」

言いかけておいて黙られると気持ち悪くて、私は先を促した。

「おまえが罪悪感を抱いているようだから言うけど……恋人とは、その、今微妙なんだよ」  
「微妙？」

上谷が、察しろよとでも言いたげに睨んできた。

私は私で男らしくはつきりしなよという気持ちを込めて睨み返してみる。

「別れ話で採めている最中だ」

「え？　なのに京都まで会いに行く予定だったの？」

「だからいくつもりだったんだよ。きちんとするために」

ああ、そっち。

まあ、電話やメールで済ませずに、顔を見てきちんと別れ話をしようと考えてるあたり誠実とも言える。

「……だったらなおさら、それをキャンセルするのって、大丈夫なの？」

「さあ。とりあえず祠の災いは今日も起きたんだ。おまえとこういう状況に陥った以上……別れ話を先延ばしにするのは、いろいろと面倒なことになりそう」

私は、なんとなく複雑な気分になる。

上谷に恋人がいるのに、こういう関係になるのは当然申し訳ない。

でもこのタイミングで上谷たちが別れるのも……今回の件のせいみたいで、どっちにしても申し訳ない。

いつから上谷たちが微妙な関係だったのかは知らないけどさ。

「京都市……必要だったら付き合ってもいいよ」

「……ああ、まあそれは俺が考えるよ」

上谷は疲れたように言うと、ため息をついて肩を落とした。

\* \* \*

広瀬真雪と俺——上谷理都は同期だ。

会社の部署が違うため、普段の仕事ではあまり接点はない。

けれどこの会社は同期入社同士を競わせることで、社員のスキルアップを狙っているらしく、なにかと関わりがある。

俺と広瀬はその中でも、犬猿の仲のような、ライバル関係のような位置づけにあった。

脇まで伸びたふわふわの明るいこげ茶色の髪、やや釣り目がちだけど二重のくつきりした大きな瞳。かわいらしい感じの服装をしているので、見た目だけなら男受けする女だ。

仲のいい秘書課の同期が綺麗系ということもあり、二人並んでいるとそこそこ目立つ。

だが広瀬は同時に、口を開くとダメなタイプの典型とも言えた。

広瀬はキャリア志向のようで、頭の回転が速く弁が立つ。器用に立ち回って、難なく仕事をこなしていく。企画会議でも先輩社員相手に堂々と反論する度胸もあった。

そしてなにより気が強い。俺のことも、いつもなんとなく威嚇してくる。



さっぱりしているから女友達にはいいけれど、恋人にするにはかわいげがないというのが同期男性社員の共通見解。広瀬真雪は観賞用の女だと社内の男には認識されていた。

俺自身は広瀬に対してなにかを思ったことはない。ただの同期で、それ以上でも以下でもない。むしろ俺に興味がないから安心という点で、関わるのは嫌じゃなかった。

向こうが嫌そうだったから、あえて俺から近づきもしなかったが。

社員旅行で訪れた地で——こんな事態に巻き込まれなければ、顔見知りの同期程度で終わっていた相手だ。

俺たちに災いが降りかかり、今日で一週間。最初の休日を迎えた日曜日の夜、俺は広瀬のスーツケースを車のトランクからおろして、不満げに先を歩く広瀬の背中を追った。

歩きたびに、ふわふわの髪が左右に揺れる。あれをツインテールに結んだら、まるで我が家にいるトイプードルみたいだ。

俺は実家で飼っている愛犬を思い出す。

俺が家を出てから飼い始めたせいとか、実家に帰ると俺にはいつもキャンキャン吠えてくる。ついでに吠えながら逃げていく。帰省するたびに顔を合わせているはずなのに、物覚えが悪いのか、はたまた俺が嫌いなのか。

広瀬はその愛犬によく似ている。

うーっと俺を威嚇いまくするくせに、そそくさと逃げるところも。

キャンキャン吠える割に迫力がないところも。

広瀬は俺の部屋の前まで来ると、往生おとしよ際悪く俺を見た。

仕事は割り切つて要領よくこなせるのに、こういうことは下手らしい。

鍵は渡してあるのだから開ければいいのに、俺と一緒にだといちいち気にして自分ではしない。

「広瀬、鍵開ける」

「ねえ……やっぱり」

「しつこいぞ。いい加減あきら、諦めろ」

「だって！」

広瀬は怒っているような、困っているような、泣きそうな表情をした。

会社では多分見せない、彼女の弱い部分。

本当にうちのトイプードルにそっくりだ。

構い倒して虐めたい気もするし、放置して油断させて、隙をつくのも楽しそうな気もする。

俺は仕方なくポケットから鍵を出してドアを開けた。広瀬にドアを押さえさせて、彼女の私物が入ったスーツケースを室内に運び入れる。彼女の手にも大きめのポストンバッグがあった。

「ここを使え。内鍵もつけたから」

俺は玄関わきにある個室へと広瀬を案内した。

角部屋のため小さなベランダもあるから洗濯物も干せるはずだ。クローゼットも残りの期間使う分には余裕があるだろう。

あの祠ほこの岩を動かした日から、すでに一週間が経っていた。

今日になるまで、広瀬はかなりもがいていたと思う。

カラオケボックスに行った翌日から、俺たちは俺の部屋で儀式とやらを行っていた。

広瀬は一旦自分の部屋に帰ってからここへくることもあれば、会社帰りに寄ることもあった。

けれど広瀬の家と俺の家は会社を挟んで逆方向にある。

俺の家のほうが会社には近かったから、会社帰りに寄るのはよくても、そこから家に帰れば遅くなる。

それが連日続くのだ。限界がくるのは目に見えていた。

そんな日々は、俺にとっても負担だった。

さすがにキスをした後一人で帰すわけにもいかず、広瀬は嫌がったけれど、俺が車で部屋まで送った。

午後九時前後の時間帯というのは、毎晩行き来するには双方に負担が大きかった。

だから提案した。

期限まで同居しよう。

広瀬は恋人との同棲経験がなかったようで、最初かなり抵抗を示した。彼女が考えうるあらゆる言い訳を並べ立ててきた。

でも俺は、それをことごとく論破した。

俺だって恋人でもない女との同居に無理があることは承知だ。それでも、互いが望まずともベストな方法だとも思った。

それに、広瀬はわかってないのだ。

最初の夜……彼女が苦しむ姿を目の当たりにして、俺がどれほど衝撃を受けたか。

あいつはキスされて助かったとしか思っていないようだけれど、俺は本気で彼女の命が危ないのではないかと心配でたまらなかった。

青白い顔で胸元をぎゅっと握り、泣きそうになりながら唸る。

声を出すことも、動くこともできない状態に陥る。

それを救えるのは俺だけだ。

あの症状がキスで落ち着くのだとわかっている今でさえ……もしキスで落ち着かなかつたらどうなるんだと不安がつきまとう。

正直トラウマだ。

だから俺は、あんな症状が起きる前にキスをしたほうがいいと思っていた。

この一週間で、あの時間になる前からキスを始めれば症状が出ないことも確認した。

途中でやめれば症状が出るので、やはり一分ほどキスをする必要があるけれど、それで広瀬が苦しむ姿を見ずに済む。

広瀬はなぜか頑なに、症状が出てからキスという流れにこだわっているけれど。

もしあいつが俺の家に向かっている途中で電車が止まったら？

タクシーに乗っていて渋滞に巻き込まれたら？

タイムリミットに間に合わなかった時、広瀬はどうなる？

せめて午後八時五十八分の三十分前には、広瀬の近くにいたほうが俺の精神衛生上いいのだ。そのためには一緒に暮らすのが手っ取り早い。

ひとつ屋根の下で暮らすのは落ち着かないだの、迷惑をかけるだのを気にしている場合じゃない。――結局、数日前に電車が遅れて時間ギリギリになったこともあって、俺は問答無用で同居を言い渡した。

広瀬は室内を見渡した後、仕方なさそうにスーツケースを広げて荷物を片づけ始めた。持参したらしい洋服をハンガーにかけていく。

「私、掃除があまり好きじゃない……」

いきなりなにを言いだした？ この女。

「自分の部屋だけなんとかしろ。後は俺がやる」

「料理もできればしたくない」

「キッチンを使うも使わないもおまえの自由だ。それぞれ食事は勝手に済ませればいいだろう？」俺だって、広瀬を家政婦代わりにしようなんて一切思っていないぞ。

もしかしてこいつは、そういうことをうだうだ悩んでいたのか？

「部屋をシェアするだけだ。あまり深く考えるなよ」

それに、家賃も光熱費も不要だと言ったはずだ。このマンションはファミリタイプで、地方転勤になった従兄弟から借りているものだ。研修から戻った時に、転勤が決まった従兄弟から家のメンテナンス代わりに住まないかと提案された。会社に近かったし家賃も不要と言われ引っ越しを決めたのだ。

だから広瀬を呼ぶこともできた。個室がなかったら、さすがに俺だって同居は厳しいと思う。「あと三週間だ。それだけ我慢しろよ」

「わかっている！ 我慢するのは私だけじゃなくて、上谷にだって負担なことは。でも気持ちを追いつかない！」

キャンキャン吠えるトイプードル。

言っている内容はうざいけれど、発する彼女の声はかわいらしい。

本当にトイプードルだったら、嫌がるのを抱っこして撫で回してもっと吠えさせるけれど、広瀬は犬じゃない。

「片づけが終わったら出てこいよ」

俺は広瀬を構うのをやめて、自分の部屋に戻った。

「俺だって戸惑いが無いわけじゃない」

広瀬は同じ会社の同期の女。そう……女だ。

急に苦しみだした彼女の姿も俺にはトラウマ並みだったけれど、それ以上に脳裏に焼き付いて離れないものがある。

初めて儀式を行った日、唇を離れた後の広瀬の……頬を上気させて涙目で俺を見上げて、唇を唾液で濡らしている姿。

女が、セックスの時にだけ見せるような、色香と艶のある表情。

キスをしている間は息が楽になる……広瀬が俺に縋りつくように舌を絡ませるのは、酸素を求めたことだった。

広瀬は苦しんで朦朧としていたようだけれど、俺の意識ははっきりしていた。  
あんなに激しく卑猥に舌を絡めて深いキスをした。ためらいもなく絡められた舌に俺が驚いて逃げれば、彼女は必死に求めてきた。

広瀬は『これは人工呼吸だと思えばいいよね』と、いつかぶつぶつ己に言い聞かせていたけれど、俺にはただのディープキスだ。

毎晩、舌を激しく絡ませるキスをするうえに、終わると俺は広瀬の女の表情を見る羽目になる。

おかげで妙な感覚を覚え始めている。「遠距離で禁欲生活が長かったせいだな」

俺は、どっと疲れて自分のベッドに倒れ込んだ。

——研修先で出会った三歳年上の彼女は、落ち着いていてかしくくて大人だった。

俺が一時的にしか京都にいないことはわかっていたのに『遠距離でも大丈夫』と言って余裕を見せた。

逆に期限があるとわかっていたから、お互いに燃え上がった部分もある。

束縛もなく、たまに会うぐらいのスタンスが俺には染だった。

それに特定の恋人がいれば、社内で騒がれて煩わしい思いをすることも無い。

遠距離恋愛は初めてだったけれど、俺にとってはメリットが多かった。

けれど一度仕事で約束をキャンセルしてから雲行きがあやしくなっていた。

微妙な関係になっていたところで、今回の件で二度目のキャンセル。

カラオケボックスから帰った後、電話で週末に行けなくなった旨を伝えると、『私たち終わりにしましょう』と予想外にあっさりと話がまとまった。もつと揉めるかと思っただけで身構えていたから拍子抜けしたぐらいだ。

ともあれ、俺が恋人と別れたと伝えたことで、ようやく広瀬も渋っていた同居を了承したところはある。

遠距離中の恋人と別れた途端、会社の同期の女と同居。

俺たちにしてみれば仕方がないことだけれど、事情を知らない第三者から見れば不実に見えなくもない。いや、恋人がいながら同居よりは、ましだろうけれど。

「上谷、片づけたよ」

扉の外から声が聞こえて、俺は部屋を出た。

夕食を終えてすぐに迎えにいったのに、広瀬がうだうだしていたので時刻はすでに午後七時半だ。

「風呂は栓をして給湯ボタンを押せばいい。どうする？ おまえが先に入るか？」

「え？ いいよ。家主より先にお風呂に入るわけにはいかないし、私は……その、終わった後でいい」

「俺の後でいいのか？」

俺はあえて念押しした。広瀬は黙ってぐるぐるとなにかを考えている。

「先……後、どっちがいいのかな？ え、でも今から入るとしたら、お風呂上がってまたメイクす

るの？ それも面倒」

「おまえはいつも、風呂から上がった後にもメイクしてるのか？」

「は？ 違うけど、だってあんたにすっぴんさらせていうの!？」

また妙なところでこの女は……俺はこの時点ですでにいろいろ面倒くさくなって、同居を提案したことを多少後悔していた。

「おまえのすっぴんを見ても俺は気にしない。それより早く決める。時間の無駄だ。俺が先でいいなら今から入るから」

「とりあえず今夜はお先にどうぞ……」

広瀬はなぜかうなだれて、そして力なく言った。

\* \* \*

最初に上谷の家に行った時、そのマンションのグレードの高さに驚いた。同じ給料のはずなのにどうしてこうも違うの!？ と嫉妬した。まあ、地方転勤になった従兄弟の家を借りていると聞いて安心したけど。

上谷の家の鍵を手に入れ、やつの家に足を踏み入れることを許されただけでも、上谷ファンに知られたら制裁ものだ。

けれど私は、さらにそのうえをいくことになった。

なんと！ 上谷と同棲！ 違った。同居だよ、同居！

うだうだと抵抗していたけれど、夜の微妙な時間帯に毎日出かけるのもきつかったし、最終的には上谷が恋人と別れたと聞いたから渋々了承した。

恋人のいる男との同居はもつてのほかだけど、恋人でもない同期の男との同居も同じぐらいおかしき気がするんだけどね。

そして日曜日の夜に連行されて、今日は火曜日。

外で食事を済ませて、やつが帰る前にお風呂に入ったほうが精神衛生上いいことがわかってからは、すっぴん部屋着姿でタイムリミットまで個室で待機している。

その間に上谷が帰ってきて部屋でがさごそ音をたてるのを聞きつつ、件の時刻の五分前にリビングへ出ていく。

「おかえり、上谷」

「ああ」

リビングのソファに座って、上谷は肩にかけたタオルで髪を拭いているところだった。水に濡れて顔に落ちた髪が、やけに色っぽい。短パンにTシャツといったラフな格好でもサマになるところが嫌味な男だ。

私とはいえば、体のラインが見えないよう、あえてふわもこな部屋着を着ていた。薄い桃色だとラブリーすぎるので、ベージュのボーダーというシンプルな柄だ。

すっぴんも、もう諦めた。この男に気を遣うのは無駄だと思ったからだ。